

村上「(気が気ではなく) 来るでしようか？」

市川「お銀かね？ 毎日一ぺんは顔を出すそうだ……あいつら、詰まらん事に律儀なもんでね……お銀は、この店がはやってる時じぶん分からの常連なんだよ」

市川、のんびり新聞を読み始める。

村上、落ち着かない。

市川、村上に別の新聞を差し出す。

村上、しかたなく新聞に眼を落とす。

村上、ドキンとして新聞をわし驚づかみにする。

市川「どうしたんだね？」

村上「いえ……ピストル強盗の記事が出ていたもんですから……」

市川「殺しの刑事がピストル強盗に驚くテはねえだろう」

村上「いえ、それがもし、僕のピストルだったらと思ってるんです」

市川「?!」

その時、お銀が入って来る。

村上、キツとして立ち上がる。

お銀、ギグツと棒立ちになる。

市川、二人を見比べて、

「よう、久し振りだな」

お銀「(何食わぬ顔で) なんだ、市川さんかい、もう死んだのかと思ってたよ」

市川「ハハハ……ご挨拶だなア……しかし、想像してたより似合うぜ」

お銀「なにがさ？」

市川「その洋装がさ……この同僚から、お前が洋装してるって聞いて、急に逢いたくなっただ……お前知ってるだろ、この男」

お銀「さてね、この歳になると若い男の顔なんかにや、とんと興味がなくなってるね」

市川「フフ、どじょうが好きだけあって、のらくら逃げを打つのが、うまいな」

お銀「何言ってるンだい……なにか逃げる事でもありやしまし  
し……」

市川「本当かい……バスン中でとんだ殺生したんじゃないか？」

村上、術策もお銀に頭を下げる。

村上「昨日きのうのピストルを返してくれたまえ、それについては他

の事は考えない事にする」

お銀「そりゃ何のときさ、変なアヤつけないでくれよ」

村上「頼む、取り返させさえるりゃいいんだ……どこへ行けば捜

し出せるか……そのヒントだけでもいい」

市川、見かねて、助太刀をする。

市川「助けてやれよ、この男、新任だ。出世前の男に罪つみ

くると、後生ごしょうが悪いぞ」

お銀「知らないったら、くどいね……人権蹂躪じんけんじゅうりゃんで訴えるよ」

市川「ほう、乙おつな言葉知ってんな」

お銀「もつと乙な言葉知ってるよ」

市川「へえ、何てんだ」

お銀「バイバイ」

お銀、さっさと出て行く。

市川、顔をゆがめて、

「うーん。何ともならんな、君」

村上「何とかします！」

と、お銀を追うように出て行こうとする。

市川「しかし、君」

村上「いや、あいつに何とか吐かせるまでは喰らいついて離れ  
ません。どうも有難うございました」

と、市川に丁寧ていねいに頭を下げて飛び出す。

市川、慌あわてて追いかけながら、怒鳴る。

市川「出口が二つある建物に注意しろ！」